

関西民放クラブだより

■神戸・新開地に定席がオープン

江口 和之(TVO)

かつて、チャップリンが訪れたといわれ、国内有数の歓楽街であった神戸新開地。7月11日、関西で2番目になる神戸新開地・喜楽館が完成しました。



一番太鼓で客入れ

みなと神戸をイメージしたコンクリート製のアプローチとアーチ型のネオン看板そして座席は海をイメージした青色、神戸市兵庫区新開地2丁目商店街に面した鉄筋コンクリート造2階建、1階は150席、2階が62席の合計212席と、大阪・天満天神繁昌亭(2

16席)に続く上方落語常設の館です。座席数はほぼ同じですが繁昌亭は和風の建築物、喜楽館は洋風の開演があり、特に夜の公演は上方落語のみならず貸館も受付、東西落語、講談などの演芸のほか音楽やダンスの公演と幅広い演芸場として、神戸松竹座が1976年に閉館して以来、42年ぶりの誕生です。

当日は朝から、羽織袴姿の40人の噺家と地元関係者が、これも噺家で編成された楽隊を先頭に湊川公園まで30分の商店街をパレード。交通局の仕立てたポネネットバスの前で団結式など集まった市民に開館をアツピールしました。

かつて「えーとこ、えーとこ聚楽館」と呼ばれ、故・淀川長治さんを育んだ街、映画館や劇場が24も林立し「東の浅草、西の新開地」と呼ばれ一世を風靡した西日本一の歓楽街であった新開地。

こけら落とし特別公演は11日の昼席からスタート、上方落語協会・笑福亭 仁智会長の口上に始まり15日までの5日間、上方落語協会

を支える重鎮の桂文枝、桂福團治、桂文珍、笑福亭鶴瓶、桂春團治さんたちの公演が続きます。6月2日から発売の前売りはすべて完売という順調な滑り出しです。

この演芸場の関連費用を含む総費用は約3億円。建築工事費の多くは、国、兵庫県、神戸市からの補助金でまかない、必要な各種道具や運営資金は一般からの寄付に頼っているのが現状で、NPO法人「新開地まちづくりエヌピーオー」が施設を建設、所有し管理運営を行っています。上方落語協会は出演者の派遣や貸館の利用促進を担当し、自治体は文化芸術振興のためこの地域の活性化を支援、4者での促進会議がこれからの西の新開地を担って行くこととなります。

阪神淡路大震災の傷跡がまだ残る神戸ですが、4年前、新開地商店街のすし店から上方落語協会への活性化協力要請の手紙がきっかけとなり同所への進出を計画、新開地の演芸復興を熱望し、かつての活況を取り戻したい地元商店街と、2006年大阪の天神橋筋商店街に戦後初の上方定席である天満天神繁昌亭を開き、いまや約260人の噺家を抱え第2の定席を

必要としていた上方落語協会の思いが一つになり悲願成就。2017年8月16日新開地本通り6丁目のチャップリンが帽子をかぶった姿を模したモニュメントBIG M A N ゲートで名称を発表し、2丁目商店街の建設地において起工式を行い、本年7月8日にプレオープン公演そして11日のこけら落としへと繋がりました。東京都内の4席、浅草演芸ホール、上野鈴本演芸場、新宿末廣亭、池袋演芸場、と名古屋・大須演芸場、大阪・天満天神繁昌亭に続く神戸新開地喜楽館。40数年前、笑いの殿堂といわれた神戸松竹座そのあと兵庫区役所内の公会堂で年に5回開演されていた区民寄席が、寄席の文化を守り続け、さらに今回、喜楽館へと引き継がれたわけです。

神戸といえは港、異人館、スイーツ、パンですがここに新たな国自慢が完成、「えーとこ、えーとこ新開地」を合言葉に、往時よりさらに熱く、演芸文化を発展させて欲しいと思います。皆さんも神戸にお越しの節は少し西へ、是非、神戸・新開地喜楽館にお立ち寄りください。一番のマナーは「面白かったら笑う事」でございます。